

ROSEリポジトリいばらき（茨城大学学術情報リポジトリ）

Title	児童・生徒の「死」及び「自殺」に対する意識と攻撃性との関連II：調査視点に関する因子分析的検討
Author(s)	内田, 篤 / 吉田, 昭久
Citation	茨城大学教育学部教育研究所紀要(22): 161-171
Issue Date	1990-03-20
URL	http://hdl.handle.net/10109/11315
Rights	

このリポジトリに収録されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作権者に帰属します。引用、転載、複製等される場合は、著作権法を遵守してください。

お問合せ先

茨城大学学術企画部学術情報課（図書館） 情報支援係
<http://www.lib.ibaraki.ac.jp/toiawase/toiawase.html>

児童・生徒の「死」及び「自殺」に対する意識と攻撃性との関連Ⅱ

- 調査視点に関する因子分析的検討 -

内田 篤* 吉田 昭久**

はじめに

前論文¹⁾においては、現代社会に見られる病理現象の一つとしての自殺を、その低年齢化の問題を含めて攻撃性との関連から検討した。そこでは、現代の児童・生徒の持つ自殺指向性の表出形態として、「死」及び「自殺」に対する意識を捉え、さらに、自殺の一要因として考えられている「攻撃性」(aggression)を、「死」及び「自殺」に対する意識に表出するパーソナリティ形成要因の一つとして関連づけた。また現代の児童・生徒における「攻撃性」の枯渇といった視点に関して、人間の「生きる」という課題において重要な意味を持つ「社会性」(socialization)を指標として検討を加えた。これらの検討に加えて、個人が内的世界に「死」を形成していく際の重要な要因として働く個々の「死の体験」を現代の児童・生徒の置かれた社会的諸状況との関係性から捉えた。

結果として、現代の児童・生徒のもつ「攻撃性」の表出は、仮説した通り建設、または破壊の方向を持ち、自己の持つ positive あるいは negative な「社会性」の方向と関連のあることが示唆された。人間は、必ず対他者、対社会の中で生きる社会的存在²⁾である。様々な他者の中で自己を介在させながら社会を形作っていくような行為が必要となる。その社会との関わり合いにおいて、他者の存在を無視あるいは排斥の対象として位置付けることは、究極的には生命剥奪といった意図を持つ破壊的攻撃性³⁾を表出させる要因となる。これに対して、個人が、他者を自己と共に「生活」する重要な存在として位置付けるとすれば、それは個体が「生きる」と言う建設的な方向⁴⁾で自らの攻撃性を表出することに連なる。他者をどのように自分の内的世界に位置付けるかが、ひいては殺人といった生命剥奪行為として表出する破壊的攻撃性を制御(control)していく際の重要な視点となる。

以上のような二つの方向性を持つ「攻撃性」の表出形態としての自殺指向性、即ち「死」及び「自殺」の意識の表出される「攻撃性」は次のような関連のあることが示された。「死」の意識においては「観念」的あるいは「現実」的という死の意識の質的な二側面が示され、その中で、「死」を生命過程からの単なる離脱あるいは別離とする「観念的の死の意識」は破壊的攻撃性と正の相関を持つことが示された。また、「自殺」の意識においては、そのすべてが破壊的攻撃性と正の相関を示した。「死」を生からの離脱であると捉えたり、自殺を美化したりすることは、死のロマン化⁵⁾に連なる問題であり、それは、個人の持つ「攻撃性」が生命剥奪という破壊的な意図を持って表出するものであることが示唆された。

さらに、内的世界に死を形成していく際の重要な要因としての「死の体験」においては、その様相を問わず破壊的攻撃性と正の相関を示した。これは、現代の児童・生徒においては、「虫を殺す」、「蛙を殺す」といった現実的な「死」に接することと、「テレビゲームで人(キャラクター)を殺す」、「人

が死ぬのを見る」といった二次元的、擬似的な「死」に接することが内的世界において分化していず、個人の内的世界においては「死」に接近させるものとして機能していることが示唆された。

本研究においては、以上の検討をさらに細部にまで広げ、最終的な課題である「死の教育」(death education)⁶⁾の課題設定に結び付ける前提を得るために、「死」及び「自殺」の意識、「攻撃性」、「社会性」、さらには「死の体験」のそれぞれに対して因子分析的検討を行い、その構造を明らかにすることを目的とする。

1 因子分析的検討

「死」の意識、「自殺」の意識、「攻撃性」、「社会性」及び「死の体験」のそれぞれの構造を明らかにするために因子分析を行った。なお、因子分析はすべて主因子法により回転前の因子行列をもとめ、バリマックス回転により、Appendix 1～5に示す最終的な因子行列を求めた。因子解釈は、すべての構造において便宜上因子負荷量 |0.3000| 以上の項目を対象として行った。

1-1 「死」の意識に関する因子分析的検討

「死」の意識の各因子に含まれる質問項目と、構造化の際の視点及び各項目の内容に留意して解釈した各因子名を表1に示す。項目番号は、因子負荷量の高い順に示している(以下各表とも同じ)。

表1 「死の意識」の第一因子～第三因子の各因子に含まれる質問項目

因子	因子名	項目番号	質問項目	項目視点
第一因子	不可避性を伴う肉体的消滅	13	自分もいつか死んでなにかもなくなる	現実-自己: 消滅
		15	どんな人でも何かは何かも消えてしまう	現実-他者: 喪失
		10	自分が死んだら骨になって消えてしまう	現実-自己: 消滅
		6	死んだ人はもう二度と帰ってこない	現実-他者: 喪失
		30	死んでしまった犬などには二度と会えない	現実-他者: 喪失
		12	死んだ人もまたこの世に帰ってくる	観念-他者: 別離
		4	死んだら自分は何も出来なくなる	現実-自己: 消滅
第二因子	別世界化を志向する精神的離脱	3	死んだ人とはあの世で会える	観念-他者: 別離
		9	死んだ人は天国のようなどころにいる	観念-他者: 別離
		1	自分が死んだら別の世界に行く	観念-自己: 離脱
		7	死ぬということは旅に出るようなものだ	観念-自己: 離脱
第三因子	生命感縮小に基づく観念的離反	14	草や花はいくらでも生えてくるから無くなることはない	観念-自然: 離反
		11	水が汚れていても魚などがすんでいれば川や海にかわりはない	観念-自然: 離反
		5	虫などが死んでもたくさんいるからいくらでも取れる	観念-自然: 離反
		2	川や海が汚れていくのは人間が死んでいくのと同じようなことだ	観念-自然: 崩壊
		17	山などが崩れていくのは人間が死んでいくのと同じようなことだ	観念-自然: 崩壊
		8	草や木が枯れるのは死ぬのと同じようなことだ	観念-自然: 崩壊

* 項目番号、及び質問項目については、注1) pp137-139 参照 (以下各表とも同じ)

質問項目視点については、注1) pp124 参照

各因子に含まれる各項目の因子負荷量については APPENDIX 1 参照

第一因子では、「死」を生からの「消滅」であり「喪失」であるとする「現実的死的意識」の項目が中心である。項目番号12「死んだ人もまたこの世に帰ってくる」の項目は「擬似的死的意識」の項目であるが、因子負荷量がマイナスを示している(Appendix 1 参照)ことから「死んでしまった人はまたこの世に帰ってこない」と捉えることができ、「喪失」という「現実的死的意識」の視点での意味を持つ項目となる。総じて質問項目内容を見ると、「いつか死んで」、「どんな人もいつかは」、というよう

に「死」の不可避性を伴ったものである。さらに、「何もかもなくなる」、「骨になって消える」、「何もできなくなる」といった、肉体の消滅という特徴が挙げられることから、「不可避性を伴う肉体的消滅」の因子と解釈した。

第二因子においては、項目番号9「死んだ人は天国のようなところにいる」のように「死」を単なる生からの「離脱」であり「別離」であるとする「観念的死の意識」の項目から構成されている。そこでは、「あの世」、「天国」、「別の世界」といった死後の世界が想定されており項目1、項目9のように、「会える」、「いる」、「いく」という死後における自己の存在が浮彫りにされる。以上のことから「別世界化を志向する精神的離脱」の因子と解釈できる。

第三因子は、その「死」の対象が自然であることから、人間という枠組みを越えた「死」の意識や生命感の広がりという点から捉えられる。ここでは、観念的な自然に対する死の意識としての「離反」という視点が挙げられる。離反とは「虫などがいくら死んでもたくさんいるからいくらでも取れる」、「草や花はいくらでもはえてくるからなくなることはない」等、自然に生きる虫や植物などの「死」を現実的な存在消滅という形で「死」とかけ離れたものとして捉えることである。また、現実的な自然に対する死の意識としての「崩壊」が、負の負荷量をもって示されたことから、「草や木が枯れる」「川や海が汚れる」等の自然の崩壊現象を自然の「死」として意識していないことを伺わせる。これは自然に対する生命感の希薄化の一側面を示している。従ってこの因子を「生命感縮小に基づく観念的離反」の因子と解釈した。

1-2 「自殺」に対する意識に関する因子分析的検討

「自殺」に対する意識の各因子に含まれる質問項目と、具体的質問項目視点、及びその内容に留意して解釈した因子名を表2に示す。

表2 「自殺に対する意識」の第一因子～第二因子の各因子に含まれる質問項目

因子	因子名	項目番号	質問項目	項目視点
第一因子	生命損失行為の積極的許容	23	みんなにのけものにされるくらいなら死にたい	自己-積極: 願望
		27	貧しくて惨めに暮らすくらいなら死にたい	自己-積極: 願望
		20	治らない病気で苦しむのなら死にたい	自己-積極: 願望
		22	死んだ恋人に会うのに自分から死ぬなんて素敵だ	他者-積極: 美化
		24	危険な遊びで間違っただけで死んだとしてもその人の運命だ	他者-消極: 許容
		26	責任をとって自分から死ぬなんて立派だ	他者-積極: 美化
第二因子	生命軽視行為への積極的関心	21	好きなオートバイを飛ばして事故で死んだとしても幸せなことだ	他者-消極: 許容
		25	たとえ事故で死んでも車やオートバイを乗り回したい	自己-消極: 関心
		29	たとえ大怪我で死ぬことがあってもスリルのある遊びをしたい	自己-消極: 関心
		19	身体を壊して死ぬことになってもシンナーやたばこはすいたい	自己-消極: 関心

*質問項目視点については、注1) p125 参照
各因子に含まれる各項目の因子負荷量については APPENDIX 2 参照

第一因子では、自ら死ぬことを目的とした「積極的自殺」に対応する意識の項目が中心である(表2)。そこには「～なら死にたい」といったある状況下での生命損失行動の願望が強く表れている。さらには表2に示すように、「素敵だ」、「立派だ」、「運命だ」という言葉から、自殺を許容する姿勢が明確化されている。このことから、この因子は「生命損失行為の積極的許容」の因子と解釈した。

第二因子は、死ぬことが直接の目的ではないが死の危険性を伴った行為の結果として死に至る場合の

ような、「消極的自殺」に対応する意識の項目を特徴とする。ここでは項目25のように「死んでも～したい」という、欲求充足のために「死」を軽視する姿勢が伺え、それは個人の積極的な取り組みを前提とすることから「生命軽視行為への積極的関心」の因子と解釈できる。

1-3 「攻撃性」に関する因子分析的検討

次に、「攻撃性」の各因子に含まれる質問項目と、具体的質問項目視点、及びその内容を留意した上で解釈した因子名を表3に示す。

表3 「攻撃性」の第一因子～第二因子の各因子に含まれる質問項目

因子	因子名	項目番号	質問項目	項目視点
第一因子	焦燥感を伴う 言語的攻撃制御	12	いらいらした気分を吹き飛ばすように、わめきちらす	自己-破壊
		16	むしゃくしゃすると、大声で怒鳴る	自己-破壊
		2	むきになって、めちゃくちゃさからう	他者-破壊
		10	頭に来ると、人が傷つくようなきつい文句をいう	他者-破壊
		6	バカにされると、逆に相手を馬鹿にする言葉でいいかえす	他者-破壊
		14	きらいな人は相手にしない	他者-破壊
第二因子	自己確信を伴う 自己制御	1	同じ失敗をくりかえさないように、自分のしたことをきちんと見直す	自己-建設
		5	自分に対して悔しく感じるから、自分の間違いをきちんと反省する	自己-建設
		9	自分で強くなるように、一つのことをいっしょうけんめいやる	自己-建設
		13	いろんなことを知らないと恥づかしいから、いっしょうけんめいに勉強する	自己-建設
		4	何でも人にまかせて、進んで自分からは何もしない	自己-破壊
		7	住みやすい町にするための奉仕作業などに積極的に参加する	他者-建設

*質問項目視点については、注1) pp125 参照
各因子に含まれる各項目の因子負荷量については APPENDIX 3 参照

第一因子においては、因子解釈に用いるすべての項目が「破壊的攻撃性」の項目であるが、そのすべてにおいてマイナスの因子負荷量が示された(Appendix 3 参照)。ここでは「わめきちらす」、「どなる」、「文句をいう」、「言いかえす」といった言語的な攻撃性に関する項目がマイナスの負荷量を示している。これは「わめきちらさない」、「怒鳴らない」という言語的攻撃の抑制、制御としての意味を持つ。さらにそれは、「むしゃくしゃしても」、「頭に来てても」という焦燥感を伴う状態であることから、この因子を「焦燥感を伴う言語的攻撃制御」の因子と解釈した。

第二因子は、「建設的攻撃性」の項目を中心に構成されている。項目番号4の項目は「破壊的攻撃性」の項目であるが、マイナスの因子負荷量を示しているため「何でも人に任せることはしないで、すすんで自分から何でもする」と解釈でき、他者との関係性の枠組みから捉えれば、このような態度を保持していこうとする建設的な意図として受けとめられる。また質問項目の内容からは「見直す」、「反省する」、「いっしょうけんめいやる」など、自省・自戒・修行といった自分自身を厳しく律するような自己制御という行為性が浮彫りにされる。また、自己制御の目的として「失敗をくりかえさないように」「自分に対してくやしく感じるから」等、本来の自分の在るべき姿を保持しようとする姿勢を伺うことが出来る。これらの点を踏まえて、この因子を「自己確信を伴う自己制御の因子」と解釈した。なお、この因子に関しては、吉田他(1986)⁷⁾の「攻撃性の因子分析的検討」において解釈された第一因子と同様のものであり、現代の青少年の持つ攻撃性の特徴として考えることができる。

1-4 「社会性」に関する因子分析的検討

前述の「攻撃性」等と同様に、「社会性」の各因子に含まれる項目と、解釈した因子名を表4に示す。

表4 「社会性」の第一因子～第四因子の各因子に含まれる質問項目

因子	因子名	項目番号	質問項目	項目視点
第一因子	親への信頼感に基づく統制的行動	39	家の人が作ってくれた食べ物は、せっかく作ってくれたのだから残さず食べる	家庭-自己-POSI: 配慮
		38	親を尊敬しているので、自分の手伝えることは進んでする	家庭-他者-POSI: 信頼
		31	親は自分のためになることを言ってくれるので、親の話はまじめにきく	家庭-他者-POSI: 信頼
		34	親に注意されても、嫌いな食べ物は残す	家庭-自己-POSI: 自己中心
		17	親に手伝いなどを頼まれても、自分の嫌なことは断る	家庭-自己-POSI: 自己中心
		21	家の人が心配しないように、暗くならないうちに早くかえる	家庭-自己-POSI: 配慮
		36	家の人はそれぞれ仕事があるので、めんどくさいことでも自分のことは自分でする	家庭-自己-POSI: 配慮
第二因子	級友への積極的配慮を伴う協調的行動	32	自分が出来たことはクラスのみんなんも出来ると嬉しいので、協力してあげる	学校-他者-POSI: 共生
		29	自分がされて嬉しかったことは、クラスの友達にもいろいろ自分からしてあげる	学校-他者-POSI: 共生
		26	自分の嫌いなクラスの人でも困っていたら、友達として手を貸してあげる	学校-他者-POSI: 共生
		18	クラスで何かを決めるときは、みんなと一緒に一生懸命考える	学校-自己-POSI: 協調
		35	クラスの友達ができないような勉強を、みんなと一緒に考えて考えあう	学校-自己-POSI: 協調
		24	教室などみんなでするところは、いつもみんなと一緒に掃除する	学校-自己-POSI: 協調
第三因子	級友への積極的関心に基づく共生的行動	27	友達と遊ぶよりたのしいので、テレビゲームなどで一人で遊ぶ	学校-自己-NEGA: 孤立
		37	学校で友達にいろいろ注意されても、友達はうるさいだけなので知らんぷりする	学校-他者-NEGA: 拒絶
		33	学校では友達を作るのは好きではないので、自分から友達とは遊ばない	学校-自己-NEGA: 孤立
		30	嫌いな友達とははなしたくないので、話かけられても無視する	学校-他者-NEGA: 拒絶
		23	学校は面白くないので、仮病を使って一人で家にいる	学校-自己-NEGA: 孤立
第四因子	大人への信頼感を伴う開示的行動	22	頼りになるので、悩みごとは親に相談する	家庭-他者-POSI: 信頼
		19	親に話すともみんなに話されるので、自分の秘密は話さない	家庭-他者-NEGA: 疑惑
		40	親に言わないで買ったものは、見つからないよう隠しておく	家庭-他者-NEGA: 疑惑
		25	親は自分のことをすぐたがうので、遊びの行き先などごまかしていく	家庭-他者-NEGA: 疑惑
		20	先生はうるさくていやなので、大事なことは聞いていないふりをする	学校-他者-NEGA: 拒絶
		28	自分の欲しいものは、親に反対されても買う	家庭-自己-NEGA: 自己中心

*質問項目視点については、注1) ppl26 参照
各因子に含まれる各項目の因子負荷量については APPENDIX 4 参照

第一因子では、項目番号34と17がマイナスの因子負荷量を示した（Appendix 4 参照）。結果は、項目番号34の項目内容が「親に注意されなくても、嫌いな食べ物は残さない」、項目番号17については「親に手伝いなど頼まれたとしても、自分の嫌なことでも断らない」となり、親への配慮というpositiveな社会性の表出が伺える項目として位置付けられる。また、他の項目も「家庭におけるpositiveな社会性」の項目から構成されており、そこでの対象は親である。さらに、「親を尊敬しているので～する」、「親は自分のためになることを言ってくれるので～する」といったように、親への信頼感が明確化され、それに基づいた自らの行動の統制が伺える。したがって第一因子は「親への信頼感に基づく統制的行動」の因子と解釈した。

第二因子は、すべて「学校におけるpositiveな社会性」の項目から構成されており、そこでの対象はクラスの友達である。「協力してあげる」、「手を貸してあげる」、「一緒にになって考えあう」等、協力、協調的行動を抽出することができ、そこには「自分が出来たことはクラスのみんなんも出来ると嬉しいので～してあげる」、「自分がされて嬉しかったことは～してあげる」といった積極的な配慮の姿勢を伺い知ることが出来る。これらの点から、この因子を「級友への積極的配慮を伴う協調的行動」の因子と解釈した。

第三因子は、「学校における negative な社会性」の内容を持つ項目がマイナスの負荷量を示して構成されている（Appendix 4 参照）。そのため、質問項目は「友達と遊ぶのが楽しいから」、「友達を作るのが好きだから」等となり、友達への自発的な関心が見られる。また「うるさいだけではないので知らんぷりしない」、「話かけられても無視しない」等から、他者との共生的な行動として位置付けられ

る。以上のことからこの因子を「級友への積極的関心に基づく共生的行動」の因子と解釈した。

第四因子では、「家庭における positive な社会性」と、負の負荷量を持った「家庭におけるnegative な社会性」の項目とから構成されている。「頼りになるので」、あるいは負の負荷量のために「親に話してもみんなに話されることはないので」、「親は自分のことを疑わないので」と捉えられる項目内容から、親への信頼感の表出が伺える。また、それらの結果として「自分の秘密でも話す」、「遊びの行き先など誤魔化さない」という、先生、親等の大人への自己開示的行動と位置付けることができる。このことから、第四因子は「大人への信頼感を伴う開示的行動」と解釈した。

1-5 「死の体験」の因子分析的検討

「死の体験」の各因子に含まれる質問項目番号と、構造化の際の視点および質問項目内容に留意し解釈した各因子名を表5に示す。

表5 「死の体験」の第一因子～第二因子の各因子に含まれる質問項目

因子	因子名	項目番号	質問項目	項目視点
第一因子	行為的体験からくる 快的感情	3	つぶした瞬間が気持ちいいので、アリや毛虫などをわざとふみつぶしたことがある	現実-快
		7	おもしろ半分で、カエルなどの小さな動物を殺したことがある	現実-快
		11	人が殺されるシーンが好きなので、刑事ものなど人がよく死ぬ番組をおもしろがって見たことがある	擬似-快
		1	人（キャラクター）が死ぬのがおもしろくて、テレビゲームの中でばたばたと人を殺したことがある	擬似-快
第二因子	視覚的体験からくる 不快的感情	.9	いやな感じを受けながら、動物などが殺しあうシーンをテレビや映画などで見たことがある	擬似-不快
		4	気持ち悪い思いをしながら、原爆で死んだ人のひどい様子を見たことがある	擬似-不快
		8	気持ち悪かったけれど、車にひかれてグチャグチャになった動物の死体を見たことがある	現実-不快
		6	ぞくぞくしておもしろいので、雑誌などに出ている死後の世界や幽霊などをよるこんで見たことがある	擬似-快
		12	死んだ動物にさわるのはいやだけど、死んだペットをかたづけたことがある	現実-不快

*質問項目視点については、注1) ppl27 参照
各因子に含まれる各項目の因子負荷量については APPENDIX 5 参照

第一因子は、すべて快の感情を引き起こす体験であり、「ふみつぶしたことがある」、「殺したことがある」等、行為的な体験から構成されていることから「行為的体験からくる快的感情」の因子と解釈できる。

第二因子においては、不快の感情を引き起こす体験が中心であり、「見たことがある」という視覚的な体験から構成されている。このことから、第二因子を「視覚的体験からくる不快的感情」の因子と解釈した。

2 現代の児童・生徒の心理ダイナミズムの特徴

2-1 児童・生徒の持つ「死」及び「自殺」に対する意識

前述の通り、現代の児童・生徒の内的世界の枠組みに位置づく「死の意識」は三因子から捉えられることが検証された。自己あるいは他者に対する死の意識においては、前論文⁸⁾における二つの死の意識の質を抽象化した形での因子が抽出された。更に、前論文では明確な方向性を欠いた「自然に対する死の意識」が、一つの因子としての意味を持つことが示された。「死の意識」の第一因子の内容は、「死」について我々が現実目にあたりに来ることであり、それは、現実から居なくなるということであっ

て、「死は人間存在の不可欠部分」⁹⁾としての「死」と位置付け得る。これに対して、第二因子においての「死」は、擬似的に捉えられるものであり、シュナイドマンのいう別世界化をともなった「敵であることを忘れ去られた」¹⁰⁾死を意味しよう。人間は必ず死を迎える。現代においては、これらの側面はある意味では嫌なもの、嫌われるものとして遠ざけられ、またある面においては様々に虚飾されて個人を引き寄せるものとして位置している。前者のように死を位置付けるとすれば、シュナイドマンの指摘するように、「死を理解することが深くなれば、死に対する態度が否定的となり死を考える事さえ拒絶」¹¹⁾するようになり得る。また、後者のように死を位置付ける場合には、「死のロマン化」の文脈から自らを「死」に接近させていくことさえ考えられる。しかし、「生きる」と言うことを考えていく上で、「死」を考えることは避けられない問題である。C, G, ユングは、「死を目指すべき目標と見ることは衛生上有益であり、やむべきものと見ることは人生の後半を無意味にしてしまう」¹²⁾とする。「死」を「生きる」ことに建設的に位置付けていくとすれば、必ず訪れる現実としての「死」の認識は重要な課題となると言えよう。逆に、誤った虚飾された「死」のみを認識することは、結果として人を「死」に近づけるだけにしか機能し得ない。この点から、本研究における死の意識の第一、二因子の内容の教育的位置付けの重要性が明確化されよう。また、その死の意識の広がりという点において言えば、現代の児童・生徒の内的世界では、人間の死とかけ離れたものとして自然の死が位置づいている。自然崩壊という現代文明の問題は、自らの生命の維持という問題と連なることである。自然との共存という視座をとるとすれば、第三因子の持つ意味は「自然の死」の negative な側面を示し得る重要な意味をもっているといえよう。

また、「死」への接近願望である自殺指向性としての「自殺に対する意識」においては二因子が抽出された。そこでは、自殺形態による違いが明確化された。一つは、直接に死を目的とした場合と、いわゆる自殺行為と言われるような結果としての死を迎えた場合とである。前論文における「自殺に対する意識」の構造化の際には、自殺における意図の方向としての二側面を捉えたが、この結果が検証されたと言える。現代のマス・メディアの問題として情報過多が挙げられるが、これは「自殺」についても同様のことが言える。漫画やテレビドラマの中で表現される自殺は、勇気ある行動として美化され虚飾されて、児童・生徒の内的世界に位置づく「自殺」の枠組みに影響を与えている。個人が実際に想起する「自殺」はそのような情報に少なからず左右されるものであり、それは現代文化が作り上げた「自殺」と言う言葉に含まれた意味内容を反映したものである。そのような影響を除いて、個人の持つ自殺指向性を捉えるために挙げた「消極的自殺」に対する意識が、前論文においては明確化されなかったが、本研究における因子分析的検討においては、現代の児童・生徒の持つ「自殺に対する意識」の重要な一側面として抽出された。

2-2 現代の児童・生徒の持つ攻撃性とその指標としての社会性

表3に示す通り、現代の児童・生徒の持つ攻撃性は二因子から特徴づけられた。

第一因子の攻撃性は、焦燥感を伴う場面での言語的攻撃の制御と言う形で表出する攻撃性である。これは、自己に対しての攻撃性の視点から捉えれば、「わめきたい」、「どなりたい」といった自己破壊的攻撃性の抑圧という心理機制として位置付けられるが、他者との関係性の枠組みのなかで捉えるとすれば、その関係性の保持という建設的な攻撃性として位置づけ得る。それ故に、攻撃性の制御という問題は、自己の生活に重要な意味を持つ他者、またはその関係性の中における自己をどう自己の内的世界に位置付けていくかといったことが重要なのであり、そこでは個人の持つ社会性が指標となる。さらに

第二因子では、自己の在り様を保持しその状態を保とうとするために自己を制御するという形での攻撃性の側面が示唆された。自己をどのように制御して生きるかの問題は、人間が人間らしく「生きる」という課題に連なる問題である。現代の児童・生徒の内的世界に位置づく攻撃性は、自己を制御する形で発露されているものと捉えられ、それは、他者との関わり合いのなかでより明確な意味を持ってくるものであって、社会性との関連のなかで意味を持つと位置付け得る。

このように、攻撃性を意味づけるものとしての社会性は、本研究においては四因子から特徴づけられた。前論文で示した生活空間においての社会性の違いは、社会性の表出対象が親（大人）であるか級友であるかという点において明確化されたが、社会性の一つの方向としてのnegativeな側面は、因子としての意味を持たなかった。これは、negativeな社会性として位置付けた「自己中心」行動、「疑惑」行動、「孤立」行動、「拒絶」行動等は、現代の児童・生徒の意識水準においては「行っていない」行動として内在化していると考えられることができる。

親に対して表出される社会性の基盤となる心理機制は、第一因子、第四因子に特徴付けられるように「信頼感」である。現代の小・中学生は、両親への心理的依存が大きい¹³⁾とされている。しかし、この心理的依存は、ガントリップが「独立と相補的なもの」¹⁴⁾とする依存性の肯定的側面のもたらす結果としての「信頼感」であり、自己を親から独立したのものとして位置付けようとする心理機制に基づく「信頼」であることを予想させる。この信頼は、エリクソンが「今後の発達に必要な自己の内なる強さを培っていくため」¹⁵⁾と指摘するような心理機制の表出であり、一方が第一因子に示された「自己統制的行動」であり、他方が第四因子に示された「信頼」を伴った形での「自己開示的行動」であって、双方の視点が、社会性育成の重要な枠組みとなることを示唆していよう。

また、級友に対して表出される社会性は、学校生活における諸々の具体的場面との関連から、級友との人間関係性を中心とする集団生活における他者への配慮、および関心が心理機制として働いていることを伺わせる（第二因子、第三因子）。これは、他者への積極的な関わり合いであり、結果として「協調的行動」、「共生的行動」といった、他者と共に生活していこうとするpositiveな方向における社会性の表出が教育課題として、重要であることを示唆している。

本研究においては、攻撃性と社会性との関連についての詳細に関しては、枚数の関連から明確な検討を行わなかった。しかし、因子分析的検討から特徴付けられた攻撃性は、社会性との関連においてより強い意味を持つことが伺われた。それは、人間が「社会的存在」であることに根ざしている問題でもある。自己制御という形で表出する自己への攻撃性は、他者との関係性を保持する方向を持つものである。人間が、社会の中で「生きる」存在である以上、それは、他者を認め、他者を共に生きる存在として位置付ける社会性育成の課題を明確化することに連なることであろう。

おわりに

人間は、必ず死する存在である。様々な時期に様々な形態で死はすべての人に訪れる。しかし、そのときの死はすべての人に一様の意味を持っているわけではない。あるものはそれが別の人生であり、またあるものは人生の目的であったりする。その様な必ず訪れる死に対する態度を我々はどのように形成していくべきなのであろうか。アメリカでは、ほぼ25年前から「Death Awareness」（死についての気づき）¹⁶⁾という運動が始まった。これは、個人としても社会全体としても死の現実の許容を拒絶し続けて

いることの社会的、人間的課題が認識され始めたことに依る。内的世界に死への態度を形成していく過程において、個人が属する文化の影響は大きい。それはマスメディアを通して、また日常生活のなかで様々に表現される。それは、美しく勇気ある行動としての死であったり、素晴らしい別世界の死であったりする。しかし、それは観念的に作り上げた死であり、現実の死の持つ重要な意味を失った死である。その重要な意味とは、ある個人の死によって引き起こされる喪失感や悲嘆の内的世界への内在化であり、それは、実際に生きているものの死を通して初めて体験し得るものであろう。シェーラーは、「私達はまず死んだものの死を体験するのではなく、すでに他人の生が死に向かっているところを見て、それがなにか私達自身の生存に関わるものとして体験する」¹⁷⁾と指摘する。本研究においては、児童・生徒の持つ死の意識、自殺の意識の検討を通して、その意識は、自らを死に近づける方向で働くものであることが明らかとなった。それは観念的に死を捉えることであり、生命損失・許容行為を肯定することである。このことは、現代社会・文化が作り上げた観念的な「死」の影響と考え得る。現実の死を体験することが減少した現代社会の中で、人間の死の現実を捉え、かつ、伝えるためには、適切な「死の教育」(death education)を児童・生徒に与えることが必要であろう。今後は、この視点からより具体的な検討を加えていく予定である。

死の意識の表出作用を規定する攻撃性をいかに制御するかという問題については、本研究においては明確な分析を行わなかったが、しかし、人間が人間として生きる以上は、他者との関係における攻撃性の表出は「生きる」という課題と切り離せない問題である。そこでは、他者への信頼、配慮といった社会性の形成の重要性が含まれる。他者をどう位置付けるかは、攻撃性の視座から捉えれば他者をどう攻撃するかであり、ひいては他者の「死」をどう位置付けるかに連なる問題であろう。これらの点を加えて、心的エネルギーとしての攻撃性の持つ意味を明確化していく予定である。

最後に、本研究は、内田の1987年度茨城大学教育学部卒業研究¹⁸⁾で得た資料を再整理し、新たに因子分析的検討を行ったものである。この結果をもとに、吉田が草稿を検討している。研究の実施にあたっては、教育臨床心理学研究室ゼミナールに所属する学生諸氏の、多大な貢献のあったことを付記して、深甚の謝意を表したいと思う。

注

- 1) 内田 篤・吉田昭久「児童・生徒の『死』および『自殺』に対する意識と攻撃性との関連」茨城大学教育学部教育研究所紀要 1989 pp.123-139
- 2) E. デュルケム、宮島訳「自殺論」(中央公論社、1975) 参照
- 3) 本研究においては、攻撃性を「他人を傷つけ、危害を加え、強制し、辱めるといった行動を、現実的ないしは幻想的な様式で実現する傾向あるいは諸傾向の総体をいう」(J. ラプランシュ、J. B. ポンタリス、村上訳「精神分析用語辞典」みすず書房 1977 pp.123-128) という精神分析学的視座から位置付けている。
- 4) R. メイは、攻撃性の建設的な側面として、「前進すること」や「接近すること」としての意味合いを挙げた。(R. メイ、小野訳「わが内なる暴力」誠信書房 1980 pp.182-188)
- 5) E. S. シュナイドマン、白井、白井(幸)、本間訳「死にゆく時—そして残されるもの」(誠信書房、1980) pp.97

- 6) 「死の教育 (death education)」に関しては、以下のような文献を参照されたい。
 Kubler-Ross, On Death and Dying New York, Macmillan, 1965
 E.Morgan, Why Death Education : a Manual of Death Education and Simple Burial
 Burnsville, Celo Press. 1977
- 7) 吉田信仁, 吉田昭久, 小熊 均「現代青少年の心理ダイナミズムの特徴」
 茨城大学教育学部教育研究所紀要 1986 pp.167-180
- 8) 前掲書 注1) 参照
- 9) E. キューブラ・ロス, 川口訳「続・死ぬ瞬間」(読売新聞社, 1977) pp.25
- 10) 前掲書 注5) pp.97-99
- 11) 日野原重明, 山本俊一編「死生学・Thanatology」(技術出版, 1988) pp.19-21
- 12) C.G. Jung, Modern man in search of a soul, Harcourt Brace and Co. New York. 1933
- 13) 深谷昌志, 「社会性を育む家庭環境」教育と医学 1989 vol.37 no.9 pp.26-31
- 14) H. ガントリップ, 小此木, 柏木訳「対象関係論の展開」(誠信書房, 1981) pp.86-95
- 15) E. H. エリクソン, 鎌沢「洞察と責任」(誠信書房, 1971) pp.237
- 16) N. ウォルターは, 現代社会を「死を抹殺する社会」としている
- 17) E. ユンゲル, 蓮見訳「死 その謎と秘義」(新教出版, 1972) pp.27-28
- 18) 内田 篤「死および自殺に対する意識と攻撃性との関連について」茨城大学教育学部卒業論文
 1987 (未発表)

APPENDIX 1~5

APPENDIX 1
 回後の因子行列 (死の意識)

因子 項目	FACTOR 1	FACTOR 2	FACTOR 3
1	-0.185	0.525	-0.051
2	0.019	0.213	-0.401
3	-0.242	0.602	-0.018
4	0.455	-0.244	0.005
5	0.182	0.189	0.437
6	0.523	-0.194	0.056
7	-0.153	0.350	-0.042
8	0.072	0.185	-0.324
9	-0.087	0.542	-0.058
10	0.525	-0.044	-0.006
11	0.152	0.093	0.438
12	-0.489	0.251	-0.078
13	0.673	0.006	0.020
14	0.132	0.166	0.441
15	0.580	0.046	0.088
16	0.035	0.286	0.129
17	0.089	0.092	-0.394
30	0.508	-0.105	0.112

*表1の各因子に含まれる
 各項目の因子負荷量を強調させて示す

APPENDIX 5

回転後の因子行列 (死の体験)

因子 項目 番号	FACTOR 1	FACTOR 2
1	0.420	0.168
2	0.208	0.221
3	0.553	0.026
4	0.131	0.427
5	-0.005	0.280
6	0.331	0.383
7	0.525	0.100
8	0.247	0.413
9	0.215	0.511
10	0.179	0.056
11	0.498	0.271
12	0.071	0.334

*表5の各因子に含まれる
各項目の因子負荷量を
強調させて示す

APPENDIX 4

回転後の因子行列 (社会性)

因子 項目 番号	FACTOR 1	FACTOR 2	FACTOR 3	FACTOR 4
17	0.446	-0.094	-0.152	-0.158
18	0.238	0.514	0.077	0.130
19	-0.038	-0.031	-0.036	0.530
20	-0.286	-0.181	-0.315	0.382
21	0.354	0.296	0.017	0.303
22	0.304	0.282	-0.089	0.361
23	-0.202	-0.035	-0.305	-0.246
24	0.309	0.369	0.084	0.279
25	-0.266	-0.022	-0.313	0.427
26	0.013	0.539	0.224	0.129
27	-0.139	-0.096	-0.440	-0.036
28	-0.318	-0.055	-0.158	0.372
29	0.052	0.581	0.172	0.029
30	-0.011	-0.174	-0.357	-0.244
31	0.502	0.366	-0.003	0.335
32	0.165	0.608	0.124	0.190
33	-0.032	-0.051	-0.385	0.016
34	-0.450	-0.006	-0.136	-0.118
35	0.104	0.458	0.047	-0.002
36	0.337	0.290	0.109	-0.086
37	-0.043	-0.230	-0.439	-0.187
38	0.535	0.406	0.001	0.192
39	0.575	0.135	0.056	0.085
40	-0.080	-0.089	-0.214	-0.460

*表4の各因子に含まれる
各項目の因子負荷量を強調させて示す

APPENDIX 3

回転後の因子行列 (攻撃性)

因子 項目 番号	FACTOR 1	FACTOR 2
1	0.106	0.581
2	-0.578	-0.183
3	-0.126	0.282
4	-0.270	0.407
5	0.210	0.571
6	-0.392	-0.051
7	0.076	0.370
8	-0.220	0.025
9	-0.008	0.518
10	-0.521	-0.119
11	-0.158	0.050
12	-0.582	0.012
13	-0.035	0.518
14	-0.389	-0.049
15	-0.043	0.202
16	-0.578	0.014

*表3の各因子に含まれる
各項目の因子負荷量を
強調させて示す

APPENDIX 2

回転後の因子行列 (自線の意識)

因子 項目 番号	FACTOR 1	FACTOR 2
18	0.233	0.277
19	0.136	0.424
20	0.498	0.194
21	0.172	0.519
22	0.369	0.365
23	0.662	0.156
24	0.342	0.210
25	0.162	0.517
26	0.328	0.294
27	0.581	0.153
28	0.275	0.129
29	0.191	0.492

*表2の各因子に含まれる
各項目の因子負荷量を
強調させて示す